

令和5年度 第1回学校運営協議会 議事録

令和5年6月29日(木)@会議室

委員:協議委員[川村幸治、早坂三郎、寺野雅之、渡邊哲朗、綿世良一、滝本あゆみ]

本校委員[松井くみ子、西岡宏二、紙本享介、野崎龍、西本敦史、木原義憲]

欠席者:なし

記録:西本敦史

1. あいさつ(校長)

全校生徒100名をきっている状況の中、生徒・教員一体となって締めくくりたいと考えているところです。

→委員自己紹介

2. 茨田高校の現状・取組みの説明

- 令和4年度学校経営計画及び学校評価について

- 令和5年度学校経営計画について

本年度新着任校長が作成したポジティブアクションプラン＝生徒の進路実現に向けた幸福5段階説。コミュニケーション力を高めるため、教員には積極的に生徒と会話をする・話を聞いてあげてもらおうよう要望。そして、生徒の生活の安定のために、学校と家庭の連携をより密にとる。その上でやっと学習の力をつけることができる。基礎学力をしっかりとつけた上でなんとか高卒の資格を与えることが生徒の人生にとって重要だと考えている。最終的に生徒それぞれにあった進路実現を達成させる。

以上のことをスクールミッションとして実施していきたい。「一生懸命革命」と銘打って生徒たちを頑張らせ、教員が生徒たちを全力で応援していくような学校の雰囲気をつくっていきたいと考えている。生徒の生活の安定には、スクールソーシャルワーカーを手厚く活用できるように、工夫しながらかなりの時間を確保した。生徒の生活を支えながら、家庭との連携を強めていくために有効に機能している。

- いじめ

本年度から年間3回のいじめアンケートを実施する。今年度から、全教員が出席する情報交換会議を実施している。組織的な対応ができる体制になっている。全教職員で情報共有を密にして、小さな芽を摘んでいく方針。

- 教科書選定

スケジュールと公正な選定の流れを示す。現在、適正に選定が進んでいる。

3. 協議(テーマ:茨田高校の今後2年間について)

(議長)

ポジティブアクションプランについてどう感じられるか。

(委員)

こどもは、自信をつけてあげなければならない。自分の強みを身に付けられれば、苦手なことに對してもいい効果が生まれる。生徒の得意なところを伸ばしてあげるような指導をしてほしい。自信をもっている生徒は、多くの言葉を受け取れると思う。

(議長)

自己肯定感を育てることが大切ということだと思うが、どのように感じるか。

(委員)

こどもたちに自分の長所を聞くと、こどもだましのようなことしか答えられないが、教員が会話を引き出してやれば、できること(自分のいいところ)をどんどん見つけていくことができる。その後アンケートなど実施すれば自己肯定の数値が跳ねあがることはよくある。自分の根っこを前向きに見つめ直すことの積み重ねだと感じる。

校長の掲げるキャッチフレーズ(一生懸命革命)には、共通の認識をもつことには非常に効果が高いのではないかと。1を聞いて10実行するよりも、1を聞いて1実行していくことの方が大事なのだという認識を共有してほしい。

(議長)

ポジティブアクションプランの土台部分はまさにピアメディエーションの考え方であるが、茨田高校で取り組んで来たこの考え方について、どのように教員で意識されているか。

(教員)

授業については、明確な生徒観を意識してもらおうと思っている。めざす生徒の姿として、前向きに自信をもった姿が大切だと考えている。それを教員全員でイメージして取り組んでいる。

(議長)

茨田高校の先生たちは、生徒にどのように接しているのか。

(委員)

生徒の立場に立って指導してくれている。当たり前のことが当たり前にできない生徒たちがいることを先生方には理解してもらえていると感じる。放課後の居場所カフェの取り組みは、生徒の生活支援(家庭連携)に大きく繋がっていると思う。

(議長)

茨田高校のこれからの2年間は、どのようなことに力を入れていけばいいのか。

(委員)

学校のグラウンド隅にあるスペースを有効活用してはどうか。地域としても全面的に協力しようと思う。

(委員)

付近に借りられる農場があつたりする。事業所と連携して、学校活動でその農場を活用することもできるのではないかと。

(議長)

外部との連携する取り組みは、PTAと地域でどこまで実現できるかが勝負になってくる。拡大しすぎずにできるだけ効果をあげられるような工夫をしながら実現してほしい。

(教員)

授業や部活動などで外へ出ていく活動を継続していく。また、これまで外との連携をしていなかった取り組みについて、実施のひと工夫として、積極的に外部を頼っていきたい。

(議長)

これからの2年間で課題になってくることは

(教員)

教員ひとりにかかる仕事の負担をいかに減らすかが重要。教員に余裕がなければ、生徒に時間をかけられない。教員は減るのに仕事は減らない。どうすればいいのか悩ましい。

(委員)

ある意味「生徒のために」と考えるならば、教員が汗をかかなければならない。「生徒の満足度を持たせられるか」が勝負になってくる。負担を被っていくのではなく、いかに工夫をしていくかが重要になってくるのではないか。

(委員)

以前の経験から、閉校する学校の「生徒たちの満足度を持たせられるか」ということを議論したことがあった。同窓会・PTA・地域など外の力を積極的に借りていくことが大切になってくると考えた。「外の力を借りる」これがキーワードになる。その核になる機関車を数人でもいかに生み出すがカギになってくる。

(議長)

他校の閉校に向けた動きは参考になるのではないか。キャッチフレーズや目標を決めて、すべてをそこに帰結させるようなイメージがいいのではないか。校長のポジティブアクションを核にしてやってほしい。

(委員)

教員同士で情報共有が密に行われる体制があることについては、すべての指導の土台になるということで非常にいい体制だと感じた。一人ひとりに必要なサポート、人権的な配慮などを考えるために重要だと考える。これまで通り生徒との関わりを大切にしていってほしい。いじめアンケートについては、一つの問題には潜在的に10の小さな芽があるといった法則を考えながら、丁寧に対応していってほしい。件数を数字でだけ認識しないことが重要。

教育活動において議論をお越し、これから現場に深く関わってくるだろうチャットGPTについて、そのようなツールを使ってしまうような課題などはやめようという議論がある。チャットGPTの検証や、オリジナリティを持ったものを作るプロセスが体験できるような取り組みが今後必要になってくるのではないか。

(議長)

教員同士で情報共有が密に行われる体制は、非常に重要なことである。支援学校を中心に取り組まれていることであるため。教員が多ければ、誰かが気づいて誰かがやってくれているという中で対応できてしまう”部分”がある。教員が少ない中で感性が低下すると、生徒の小さなサイン

に気づくことができない。大きな問題につながるサインは、全員でアンテナを張ることが非常に重要になってくる。

(委員)

リソースとマンパワーが不足していく中でどうするかについて。振り切ることもいいのではない。例えば先生も含めて「楽しむ」「面白くする」というテーマに振り切るというものなど。限られた時間である。教員の善意に頼らない工夫をみんなで考えていかなければならない。どの発想に振り切るか。どのような方向性でいくか。教員も生徒も一体となってほしい。

4. 謝辞(校長)

茨田高校は、食堂業者撤退の際にPTAと地域の協力に対応できた。様々な規制の中で生徒の満足度をあげる取り組みがスムーズに進まない面があるが、そういった部分にも”汗をかいて”いきたいと考えている。

本日はご忌憚のないご意見をいただきありがとうございました。今後とも茨田高校を最後までよろしくお願い致します。